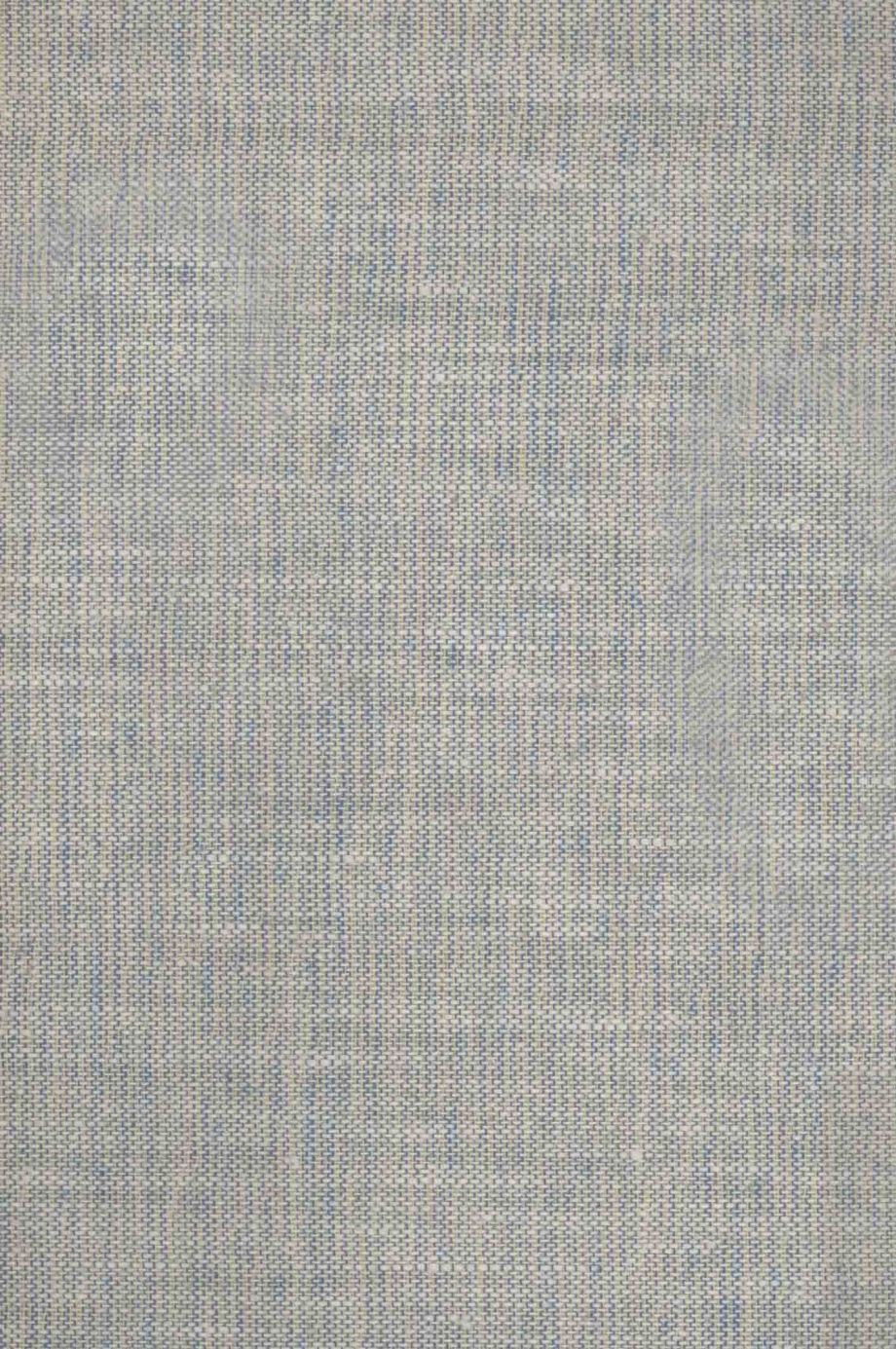




高木市之助全集

第三卷

講談社

高木市之助全集 第三卷

定価三八〇〇円

舎人人麿・憶良と旅人

昭和五十一年八月二十日 第一刷発行

著 者 高木市之助

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二・郵便番号一二二

電話・東京(〇三)九四五―一二一(大代表)

振替・東京八一三九三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

©高木市之助 昭和五十一年

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

目次

I 舎人人曆

舎人人曆 3

人曆歌集の用字法と人曆的なものとの関連について 7

人 曆 22

柿本人曆 I 35

柿本人曆 II 73

II 憶良と旅人

憶良と旅人 I 89

憶良と旅人 II 106

大伴旅人・山上憶良

序 説	140
第一章 世間虚仮 こけ と棟の花 あふち	146
第二章 あの梅この梅	157
第三章 仙女と白水郎	170
第四章 讃酒歌と思子等歌	191
第五章 湍門 せと の清澄と横山の暗澹	206
第六章 山斎 しま の挽歌的構想と野草の自然的秩序	215
第七章 憶良の七夕歌における現実の発見	221
第八章 都と鄙	231
第九章 反 発	236
第十章 文学論的現実 リアリティ について (一)	244
第十一章 文学論的現実について (二)	257

周辺の意味……………271

孤語……………287

用字法対文学論……………300

憶良と中国……………308

憶良なりの自然……………318

貧窮問答歌の「問答」における

リアリスティックな志向について……………335

貧窮問答歌の論

I プロローグ……………346

II 私なりの方法……………353

III 本文……………365

IV 文字の論……………369

V 語彙の論……………377

VI 問答の論……………400

VII	短歌の論	407
VIII	出自の論	413
IX	リアリティの論	422
X	エビローグ	431
付	貧窮問答歌校本	433
解説	犬養孝	467
解題	深萱和男	479

I
舍
人
人
磨

舎 人 人 磨

万葉の社会において、人磨文学を生み出したどんな契機が考えられるか。

いったい人磨の研究は、今日諸家の手で相当のところまで進められたけれども、これらの研究にはいつの間にか型のようなものができ、したがって研究はこのままでは行くところまで一応行き着いたという感がしないでもない。そこには要するに、一人の英雄を描こうとする、一種の天才論か、でなくとも、そこに他の万葉人たちがった独自の歌人を求めようとする個性論的性格が特に濃厚である。なにもわれわれは人磨の偉大とか独創とかいったものを否定してかかろうとするものではないが、そのような偉大な文学を生んだ人磨を、一種特別な天才者非凡人として万葉人の普通の社会から切り離そうとする、いわゆる天才論的偏向に満足することができないというだけのことである。しかしこのことは、考えようによっては相当に重大なことで、少々誇張した言い方をすれば、そこにあるいはそこにのみ、ある意味でゆきづまった人磨研究を打開する方法、換言すれば、人磨への新しい道があるといえなくもない。現に今私が調査を続けている、人磨歌集の用字法⁽¹⁾にしても、この歌集の用字法が仮りに人磨自身の工夫によった特別の用字法だったとして、人はその魅力に誘われて、そこに万葉一般の用字法に対立する人磨独創のもの、言いかえると、個人人磨、天才人磨を物色してはならないの

である。人麿歌集の用字法をとおして見られる人麿的なものは、それを生み出した万葉一般の用字法となんら異質なものであるはずはなく、ただ後者に支持せられ、後者の代表者として前者すなわち人麿的なものが考えられるだけのことで、それにもかかわらずわれわれは、そのような人麿的なものにこそかえって真に人麿的なものを認めなくてはならないのではないか。このような意味で万葉の社会における人麿の文学を生み出した少なくとも一つの契機として、今われわれは「舍人^{とねり}」を考えようとしている。——その覚え書きである。

人麿は舍人であった。人麿の代表作である、「高市皇子尊城上殯宮之時」の挽歌の短歌一首に、

埴安乃 池之堤之 隠沼乃 去方乎不知 舍人者迷惑（万葉、卷二二〇一）

とある限り、これは事実である。しかしながらただそれだけで、万葉の世界、換言すれば、人麿らによって代表された文藝の世界において、この命題の事実を、文藝的な事実として通用させることは不可能である。さらにいえば、諸文献をあさって舍人についての、語源的、制度的、ないし歴史的解釈を試みるということですら直接にはこの命題を文藝的に理會するための意味づけとはならない。なぜなら、人麿が舍人であったという事実が人麿文藝の誕生するどのような契機であったかということが明らかに限られ、この命題は文学のよそごとでしかなくなるからである。

人麿は万葉歌人中最も代表的な挽歌作者である。彼の挽歌はこれも周知のように、皇子皇女らの殯宮のときの挽歌と、愛妻を嘆いたり狭岑島の死人を弔ったりする別の挽歌と二種類に分けられるが、特に前者において人麿と舍人とは特殊の文学的関連を生じ、その関連によって、人麿は初めて舍人だ

ったことになるのである。

というのは、一般にこの種の、皇室挽歌とでも呼びたい諸作歌は、少数の例外を除けば、概して葬送関係の儀式に際してうたいまたは読みあげるために作られたと想像され、その意味において多くは、一種のマンネリズムに落ちてゐる。この種の挽歌の典型的な作家として、有名無名の舍人があり、無名作家の例としては、「日並皇子尊殯宮之時」の二十三首（巻二一七七一―一九三三）、巻十三所収の長短歌五首（三三二四―三三二八）等が代表作であり、作者名を持つほうでは、内舍人大伴家持（巻三一四七五―四八〇）の挽歌などその適例であらう。ところで一方には、人磨がこの種の挽歌の作家として最高の水準を示しているという事実がある。そこでこの二つの事実が出逢ったところに、多数有名無名の舍人による、ある程度型にはまった挽歌とそのような挽歌を克服していく、舍人人磨との関連が理解できるのであって、そのような関連に立って初めて、文藝の命題として、人磨は舍人であるのである。しかしながら、挽歌文学の最高峰は人磨において、なんとと言っても、「高市皇子尊城上殯宮之時」の挽歌（巻二一九九―二〇一）でなくてはならぬ。しばしば論ぜられているように、人磨のこの挽歌には、日本文学には珍しく、素樸な叙事詩的リアリズムが聞こえと言われるが、人磨文学のこのような性格に対しては在来の批判はいたって抽象的にこれを人磨の天分や素質に帰しがちである。前述のように私もまた天才や素質に相当の重点を置くものではあるが、同時にこのような天才を生みかつ支えるものとして一方に舍人を考えようとするものである。

人磨挽歌中でも特にこの偉編を生んだものとして、われわれは壬申の乱に活躍した一群の舍人を思い出す。いったい壬申の乱の原動力となったものはいうまでもなく天武天皇であったが、天皇の強力

な協力者として乱の事実上の推進者となった者は朴井連雄君、県犬養連大伴以下多数の舍人であつたらしい。書紀の伝えるところにしたがえば（紀が乱の顛末を記すに当たって根本の資料として使用したと想像される日記もまた舍人の筆録にかかるのだが）天皇は幾度となく舍人を招集して去就を彼らの意志に任せ、結局半数が吉野に天皇とともにとどまつたのであるから、乱をまき起こしたものはこの選ばれた、実に現実的行動的な舍人中の舍人であつたらしい。舍人人麿が、年齢等の関係から、自身乱に投じて天皇のために働くことができなかったらしいことは諸家の一致する見解であるが、同時に彼が乱の殊勲者高市皇子尊の舍人として、直接乱に参加した舍人の首脳部ときわめて近親の關係にあつたであらうとする想像もまたそんなに事実に遠いものとも考え得られない。してみると人麿の挽歌文学特に高市皇子尊の挽歌のような代表作において、そのように叙事詩的リアリズムが感ぜられるということには、もちろん種々の角度から検討を要するのであるが、少なくともその一つとして、強力な実行力や烈しい闘志をもつて天皇や皇子をたすけて乱を勝利に導いた舍人の行動的な意力が人麿を育成してこのような挽歌の作者たらしめたと考えることができであろう。してみれば、従来しばしば人麿らによつて代表されると考えられた万葉人の大君へのいわば全国民的感情として理解されてきたいわゆる忠節も、また実は特定の舍人たちの特定の大君に対する、もっと現実的また切實な生活感情だつたとすべきではないかと思う。

注 (1) 本巻所収「人麿歌集の用字法と人麿的なものとの関連について」参照。

人麿歌集の用字法と人麿的なものとの関連について

本稿は先年調べかかってそのままになっていた、「人麿歌集」の用字法をもう一度探りあげて、人麿の文藝を見直していくための一つの基礎を築こうとしたものである。「人麿歌集」については、すでに武田祐吉博士の著名な論考（『国文学研究』所収）があり、本稿もまたこれに示唆啓発されるところが少なくなかった。しかし本稿の態度は必ずしも博士のそれと同一ではなく、ここに本稿の存在理由もあるつもりであるが、ただ論の出発点を去るあまり遠くないところで筆を置かなくてはならなかったために、それだけ影の薄いものとなってしまったことはまことに遺憾である。他日このような粗描を改めて、もっときめのこまかいものにしたいと考えている。

「人麿歌集」の歌については、古来万葉学者が注目してきたところであるが、目標はいつも、もっとはっきり「人麿作歌」と銘を打った作歌との関連において、どの程度にこれらの歌が人麿の作歌として通用ないし評価されうるかというところに置かれてあったといつてよく、ことに歌集の中にどうしても人麿作と考えられない歌（一七八三）が存在する事実などにわずらわされて、不幸なこの歌集の歌は本格的な「人麿作歌」に比べて一段低く、また一段人麿から遠いものと考えられてきたきらいがあり、嚴重な学問的態度から人麿を論じようとすれば「人麿歌集」の歌を引きあいに出すことは、む

しろ控えなくてはならないかのようになさえ考えられてきた傾向がある。私はあえてこうした見解を否定するものではないが、それはそれとして、別の角度から「人麿歌集」には「人麿作歌」に求められないような人麿的なものが求められるのではないかと考えている。というのは、周知のように「人麿作歌」は主として万葉集の巻一、巻二、巻三と、きわめて少数巻四に収められているのであるが、これらの巻は、万葉集の中では最も体裁の整った勅撰集らしい部分であるから、撰者が誰であったとしても、そこには少なくとも撰者の好みによる或る勅撰的な撰択が加えられていたことにまちがいはなく、場合によって多少の字句の変更ぐらいは試みられたかもしれないほどである。そこに選ばれてわれわれの前にある「人麿作歌」はなるほど一粒よりの代表的佳作であり、しかも万葉集の構成分子として寸分のすきもない存在である。したがって歌仙とか詩聖とかいう範疇を作って尊崇の対象とするためには人麿のこうしたありかたでも別に不自由はなかったと思われるが、近頃のようにもって現実には人麿的なものを追究しようとする方法のためには、彼のこうした「人麿作歌」的なありかただけはまだ不十分である。

といって、私は「人麿歌集」が、少なくとも、万葉集をとおして求められるこの「歌集」が、十分な資料であることを保障しようとするものではなく、そこに人麿以外の歌人の作にかかる作歌もおそらく多数に書きつけられていたであろうことはむしろ当然であるが、それにもかかわらず、この雑然たる一部？の「歌集」には、「人麿作歌」にまで整理される以前のもっと人麿的なものが生きていて、それがこうしてばらばらになって、ときには誤脱を生じたりして万葉集の未整理の巻々へまぎれ込んだ後までもその名ごとりとどめているのではなからうか。もしそうなら、われわれはそこを足場とし

て真に人麿的な、したがってまた真に万葉的な世界を求めていく別の道があるのではないか。

私にこのような考えを誘ったのは、「人麿歌集」の持っている特異の用字法である。「歌集」の用字法がいかに変わっているかということについてはすでにしばしば指摘されたことであるが、ここではそれがどのように人麿的なものへつながっているかが問題である。私はまず「歌集」の用字法の実体を明らかにしなければならぬ。万葉集中、左注その他によって「柿本朝臣人麿（之）歌集」に出ていたらしく推測される歌はほぼ第一表のとおりである。

第 一 表

巻	長歌	旋頭歌	短歌 (1)	短歌 (2)	計
II			1		1
III			1		1
VII		23	33		56
IX			54		54
X			58		58
XI		12	152		164
XII			30		30
XIII	2		(<u>反</u> 1)		3
XIV				5	5
計	2	35	330	5	372

表中短歌を(1)、(2)に分けたのは、用字の上から(1)に属する歌は訓音混用の、いわば万葉集においてわりあいに広く採用されている用字法にしたがったものの、(2)は全部表音仮名を使用したもので、巻十四という特別の表音的用字法に影響されて本来の「人麿歌集」の用字はその痕跡をとどめていないと想像されるもので、したがって「人麿歌集」の用字法を目標とするこの調査では除外する必要がある、かたが

たこのような便法によって分けたのである。なお右表中の旋頭歌や長歌については万葉集中他に同型の作歌が少なく比較対照に不便だったり、一首の長さが不同だったり、その他の事情のために、対象を単に短歌(1)に属する三百三十首に限定することにした。もっとも「人麿歌集」に独自の用字法の性格を浮き出させるためにはさらに限定する必要がある、あるいは少なくともそのほうが効果的であ

るはずである。というのは、同じような左注を持った「人麿歌集」の歌であっても、その用字法の関する限りでは、明瞭に他の部分と区別のできるものと、それほどでないものと少なくとも二通りあって、たとえば、

卷七 一二四七ゝ一二五〇

同 一二九六ゝ一三一〇

卷十 一八九〇ゝ一八九六

同 二二三九ゝ二二四三

卷十一 二三六八ゝ二五一六

卷十二 二八四一ゝ二八六三

同 三一二七ゝ三一三〇

等は主として前者に属し、反対に、

卷二 一四六

卷三 二四四

卷七 一〇六八。一〇八七。一〇八八。一〇九二ゝ一〇九四。一一〇〇。一一〇一。一一一

八。一一一九。一二六八。一二六九。一二七一。

卷九 一六八二ゝ一七二五

同 一七七三ゝ一七七五

同 一七八二。一七八三。